

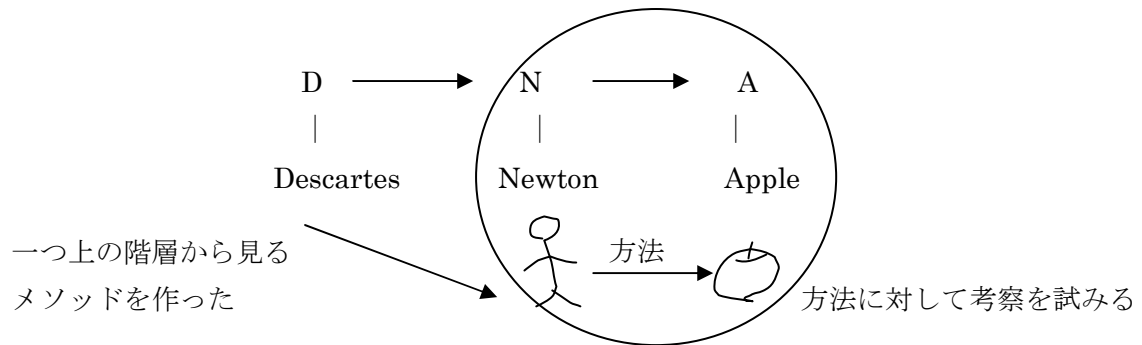
発表者：安達

出席者：嶋田研・石堂・安達・山口・中山・古川・久富

記録者：久富

○デカルトのイメージについて

安達くんが予備校で教えてもらったという“D・N・A”というイメージを紹介してくれた。



- Some tigers exist. 存在する…存在は some tigers だけで成り立つので exit は付与要素にはなり得ない
- Some tigers grow. 育つ

中世から近代になって・・・人間が自分の力を過信し始めたのか。

○方法の目的は・・・？

⇒真理に到達するために方法を考えた。

ソクラテスは・・・疑うことが最良。真理に到達できるかは問題としていない。

デカルトは・・・疑って方法を確立して真理を見つけようとしている。

- ・そもそもデカルトの真理とは？

コギトは個人が変わると真理も変わってしまうのではという疑問が出た。

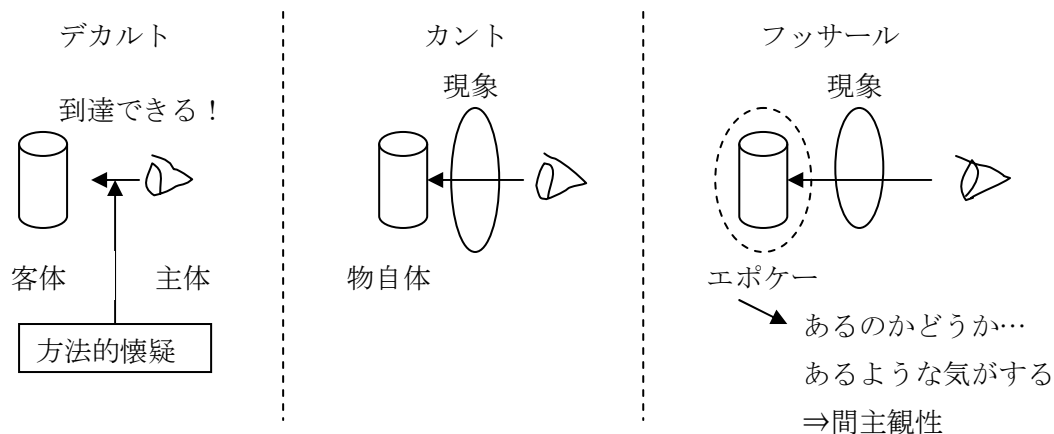
⇒本文に「方法とは誰にでも習得可能であり・・・」とある。

どんなコギトでも同じ“方法”に従えば同じ結果を得ることができる。このような方法をデカルトは求めた。

- ・デカルトのいた時代は神がいた時代。ゆえに真理はあると信じて生きることができる。
- ・しかしやはり神不在の現代に生きる私たちには真理のイメージがわからない・・・
⇒それでも真理が“ある”ことを信じて考えていくしかない。そのための“方法”。

○ 真理をめぐる抗争

ここで安達くんがそれぞれの哲学者の真理について解説してくれた。



○ そもそも真理とは何か

真理・・・共通理解にできるものなのか・・・という疑問に、真理とは価値の源泉ではないかという意見が出た。

ここから本文の内容へと入っていった。

○ 「我思う、ゆえに我あり」は本当にそんな厳密に二元化しているのか？という疑問

・思うことがすなわち存在することなので、“我”と“ある”は密接に関係するのは・・・

⇒前者の“我”と後者の“我”では、段階が違う（とフッサールが言っていた）。後者はメタ的に“思っている我”のことを言っている。

- ・ 佐伯先生の『20世紀とは何だったのか』では、30年戦争の思想・宗教の混沌状態における価値喪失の中でデカルトのこの思想が出てきたとあった。
- ・ では中世の思想の主流は何だったのか・・・

○ デカルトはプラトンの流れを汲みアリストテレスの批判を含んでいる？

- ・ プラトンは現実世界とは別にイデア界が存在するという⇒二元論
- ・ アリストテレスは物質そのものにイデアがあると言う

○ 本文にあった、“一人でしたほうが良いものができる・・・”ことについて

- ・ 自身の体験に即して考えたとき、納得できないという意見が出た。
- ・ ここでいう一人ですというのは、優秀な・賢明な一人が・・・という前提がある。
- ・ 当時、衆愚政治に陥っていたことも背景としてあるのでは⇒

⇒意識的にしろ、無意識的にしろ、そのような時代背景があったのでは・・・
絶対君主制をふまえ暗示しているのではというような意見が出た。

○ p18「前例と習慣だけで納得してきたことを・・・信じてはいけない・・・」

⇨3部 p34 「第一の格率はわたしの国の法律と慣習に従うことだった。」

矛盾しているのでは？という疑問に対して・・・

⇒思想面では疑ってかかるべきであるが、実践面では守らなければいけないものとして捉えていたのではという意見が出た。

“国の法律と慣習～” 法律と慣習は並列できるのか・・・？

○「我思う、ゆえに我あり」について

・なぜ先に自我のほうを疑ったのか。順番としては逆ではないのか？という疑問が出た。

人間は神が創ったものということを知っていたら、自我を先に疑うことにはならないと思う・・・という意見に対し、

⇒自らが確立しないことには、神のことについても考えられないと思ったのではないか。

という意見が出た。しかし、

・コギト自体を神が創ったとは考えなかったのか？とさらに疑問が深まる・・・

・“確かなもの” に到達するために方法を作る

⇒その“確かなもの” を定義するために“神” という超越的な存在が必要だった。

⇒神と人間（理性）は相互的關係にあるのでは？

・なぜ数学を疑ったのか。

⇒外界の象徴として一番“確かなもの” として数学を用いたのでは。

○ 神の存在証明を読んで・・・

・理論的に説明されても納得できない・・・

⇒私たちは“神が存在する” というアイデアを持っていないから？

・逆に神と言うからイメージが沸かない・・・名前をつけてはいけないのでは？

日本人は特にイメージしにくそう・・・八百万の神など、絶対神という感覚がない。

・アリストテレスは自然と理性を言う。理性 対 自然（神）からの思想。

そういう意味では原罪を言うキリスト教とは離れるのでは。

・実はキリストや孔子は稀代の詐欺師だったのでは・・・！？

等、さまざまな感想や意見が出た。